

安政見聞錄 下



3755  
3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 JAPAN 20

門牌  
號 3755  
卷 3

安政見聞録卷之下

○友と敵て良人の死歎と捨身條

老々人ト云信实と有とモ。後才藝云無缺に達人とも伝の心うな  
勝手よきゆめ実と竭して奉人ふ報するどくアキラム人も勝手よき  
ぬれり。日未みへ紙をうりや考あ。近づひ己富貴うること文る  
考え実あ。一時その機と失うひ落魄まるに及びてへ親きの疎あ。  
たてりてお云ひうる考も。更に衆人の心をますと。世にほれーと本音。  
然るに物の好いとつまじ。貧富窮達に拘りざること。信实う  
人となり。又子兄弟へ活く様く。支那へ元他人ある。されども弱れ支  
那とありてひ互に信实を以てあひと。今まう入れ及ばねど。その中

早稻田 大學 書  
昭和 20. 4. 1 藏  
書

に實あり不實あり。端く生と得る所ふるとりど。多く遙とり  
王を効く。又母の故へきむにより心懶れうつてやむ支をりて奴僕  
のどく。おひる手婦人あり。されども更する老宅に觸みて。その不遙  
无禮と責む。日往月来つて年と累積つひに半のどくれうて。己ゆ  
先礼するをあらび。支もまこと彼が乳母。今まこと改むべからむと。惜り頬  
に泣きあへ老中人承とみへりとまご。中人承下の支婦れむ。半  
月を箇やうの人ふ於て。信実あるべく稀う。固て矯行の轍り  
ふそへへこみ敷ひあり。然ども支婦の恩不肯。他より咎むきりのれ  
あらず。また離別の場でひらくえ未終節とく守る。不遙うござる。支  
と醜い。名離別の場でひらくえ未終節とく守る。不遙うござる。支  
のどき。すと信の心あり。般に人の信不伝を察せんとふく。平生の言  
行と見て知るべ。また小北を所きふ貧しく善く支婦あり。半のさす

婦へ支とやまへまきと帰て憐まし。假初ゆもひまひせど。賤すく事  
けむが去年十月二日の夜大暮にあて大お旅き。二人従共に外の方へ立  
出うる。その近きよう。火焚つてその家ふも大炎寝ひかりけるふど。  
元より貧しき身のとあまび。甚めて苦換とへきまき。葛縫ぐふも出  
んと崩玉。家に潜りそまへ奉うべて脊負葛縫。へり坐つるが。  
き火からぬ今少一難具をの持出んと葛縫一。妻に脊負ふ。  
近へるをうての時まで梁の物に支えらをとあけらる。ひふもあらけん  
男のとれ縫と隣まへ嗟とひて倒すとえーが灸術であしや。ちあ  
奥へ経ふける妻の大不快き憂へ立よて引取すふ。更ふ心病あらぎ  
まへ大喜あげて救困。ゆび活きどその甲斐ふ。右左まゆふひ  
へ近づきて。たゞその家に移らんとい。妻へやうく歎息し。愁ふそても

の死體と大木橋までひ丈の船う。今一個人のあべ撫ひてあひ  
場で立ちまんとにきて見えどこの擡ぎみて縋て馬車もやうも  
な。あふ船でその岸へ脊骨、葛籠を舟下へ蓋とありて中  
きる類残り多く撤出。捐支の死體と引起一力と極め抱きあ  
げてかの葛籠の中にひき蓋とふ一揆と續てまた脊に負けるが  
始めやかにせざりと重くて他に物を持びやうよ。残り脇へとくら  
どか。その夜とて捨まきてまた太い腹とくけほど今宵の強ぎ何  
がとも様うき方りあう。仕立親族の方へやたうりとも幸の  
ごと野を送りのうござかなうねば。浅草祝もの裏手にゆる  
寺もあり。まづ波心へ願ゆんと心細くゆで一個。浅草川の橋に坐ま  
す。休こと吾妻橋をつとまんとせしと先に家二十に五うる因跡れ

なり先ふたす。来かじしが妻をみ。女の身を大きやう。自詮を參  
覲て若一の己の山手の老うるがこの所ふ親族ありて今安否を訪て  
仰る己の方へ北辰を獲。家の崩落まであひとばか遠方へも來  
一う。さとば未だ不況の人あまと。難儀とふられ恩びねば。ことをす直  
ちと脊骨で追せん。又先に立て被さん。案内とせよと。女へ是  
を極り見るに。その御子を優しけと。骨退すく面魂一瞬ありと心に推  
し。その志へ城一けひととの首をあく身にも換ざる大重の物の入ま  
べ。外所人ゆへ任せぐ。との捨て衝くと。彼男へ徑足と單り吾と  
怪しき者と推して。かのどう拒む。若然らばこの界こよどもまう  
がゆく大切のあらず。又身方へ質とぞ。一心と安んじてその爲め  
と。うそく負せぬ。かくすも箇船のことをふ脚うるとも善根をあえ

とあり心うるを深く教へとくべと強てこそと脊負人とりゆゆ。女も今  
肩のきび辟るだらうふらひけとば然までに憐れとこりゆく。その正祠に往  
く。妻時妻が房とて休めん。渴てあくびとのひみそ。高嶺とす處へ下  
りまく。彼男へ立よし。いと慄くとてまとぞ脊負ひ。外の外に貴目あり。  
ひあくねおくる署と約のどく女ふくせば要とるに中へあくねど夜る。女  
の身半へ苦へりけん。去来ととあくね何方をでも送り得さきとい  
ひあくねおくる署と約のどく女ふくせば要とるに中へあくねど夜る。女  
じぞうの身あること。じぞう重くあがむゆ。遠い縁みどりへるや。り  
失るひとく。義理ゆはば。とちの結びめ小腰きりと小股に股と腰辺を。  
道をゆくと二二町。西原町と遙一頃。かの男へ前ふ立ちが物ゆひとん。振  
むまく女と殿と対倒も。云々何をう一つ。とのひつを處へ倒る。男へ  
上にまかりて。被署と奪んとて女ゆまと心若き力と窓やて署

と抑へ被りとゆりうけまく。遠近にあゝ一人ひととて彼て馳来る。彼  
男へゆて放し。高嶺と脊負一まよ。腰きふ紛き逃失る。下ふ  
入集ゆて。まづかの女と裏をと。械小何ぞ。奪ひ。と向きて渾身の塵  
うち拂ひ。在一次方と眞にかう。の擦りふとそもの男より。まの墨  
三と極り。まづこの中で見て。腰と。今集まく。被きて。る。藍  
絣の小袖。そとふ表ふる紙色の室やううるそ取ぬ。一束金にて  
二十両あく。女へ見て。ふる。て。あの大金を妻に預け。一の  
あく。と更に。ちの故を解さば。集ゆる。へく。も。まふ頭と頬けて。る。  
ふ人の死體とゆく。高嶺なりとて。かむよう。あんおと編て。奪  
ひ。彼へ正一く。盜械あまく。この署こゆそ。の皆も。泥雜の中ふへそ  
坐こと。あくねのあくん。されば箇半り。大意のへてあくんと。おひも寄

節婦  
賊にうぶて  
還て多くの  
黄金を  
済ゆ



らを。その葛籠の重げうる。定めてよ先の在人とあひ。その翁ひと遡  
んとある。この景にてとてあなるべ。ゆく純き次へと。ゆきえふかの葛  
籠あ。あん身う丈の死骸ありと。汝ふ聞きて忌とさふ溝塚をど  
へうち込ば。あん身が苦相の衣を捨てて持出うる。赤心も。水の沫とう  
ぐうとさ。亦この景に小さくもす。大金のあるあま。こことゆまこと  
今うまと。このまよ捨あま。まう此よ。せひて。公裁小任ひ若  
い。と衆議一交してその貌と。その筋へ私へけりとぞ。かくて婆入ひか  
葛籠を負ひて。逃去をす。ほひに飯一ヶつ。率実ひ。ね  
ど。縁舍川岸の丘傍に。あま持てあたける。葛籠に町若且持  
きの名き。死してあけよ。生とりて所の老母ねまうて。かの妻が往  
方を探一コマケ。妻の丈の死骸を渴て。歎びと大きめに頑

て。菩提院へ葬りて。懇懃に吊ひけり。かくて彼盗人の遺金八金く山  
女が赤心にうり。神の授けぬひ。うるんと下へ。をきと一ぐまを歎び  
りよく。佛手を延べとあ。

○  
て。小江都清草稿のきに。貧しく。著し。織支あり。ふきわど。と。慈しき  
高人の廟に務めり。深儀ある者あま。と。人の二あきのり。ひの做せ  
一ぐ。業枯得。卷の事のな。ひ。そのうき。年く。徳縁して。遙く召仕  
りの小賊をよ。せ。この男も。年未の奉公。空。く。たう。脱に脱にう  
けま。と。泣く。ちのあと。も。生て。親の方へ。歸りけど。親へ。この時七十  
候。や。元未ち。う。だ。志を活業なく。う。かに務め。在り。一。ひ。う。己が  
給金へ。遣り。ち。と。ふ。この考。う。父。母。に。送り。書ひ。け。や。どう。右。今

かく流浪の身となつて、詮方うすきべらを家ふ在り。一日貰えふる裏子  
と割りて、僅ぢうりと被れ。君みのむの方ふねゆきて、價て卑く鬻アキハたつ  
御の徳かと渴てその日くと嘗とける。すの父おひ老婦も人のあく  
出へると、勝ひ日本右小左ひわどにこの男ゆうのことを心憂く名ひて  
別小さやうすゑと借り、一人役事で暮る。と割り、妻ありきて父母に  
ひ不自由あきやう小心を避け、その牙と相計りて、老父母を害ひける。  
然るにこの夜比宸ヒヂンを逝き、家清と老夫男女壓アマシキて死マリ。と  
ほくのを嘆心も生、小惑ひ出て、かひ父母が居所へゆくふのをすべて大  
小便スズと是と入る。きやうむる。と、はそ父母へ年老て是よど小弱け  
まへ定めて、梁の下に檻カタり置け。と胸躍り泣懲クモリとて崩き。と亦て  
捨除スルけ。余誠え御くかてすれ、到るに葉のづく板摧ハラシトけ。棟ハシまで撲

へ地にあり。傍へと心も心うづけ筋力に仕一木とて、除け。家の裡で  
のぞき、姿をあげて、ゆ立まじ。まじて、參する姿もみ、まじ人ありと  
一ゆえ。かゝる速早くこの所ホシと逃出。一のうるを。と妻時均湛  
あづけ所ホシへ、丈の處ホシとて、ち娘の挑戸ハサウチを照。二人ある者あり  
かの男へ妻うけて、あのがに化。老丈婦行方へうち選ハシム。か家等  
かれて、ちするや。と向へば大の廻りの男答ハシムて、向にそまと比宸ヒヂンと  
らどれ。老丈婦のまち安ハシムて、長屋ある甲ハシム。て、勢えで、徳とて  
兩國橋の方へ逃う。まじて大きて怪我ハシム。と、夢て、食せ天ハシム。と、  
り。彼男ハシム。あひ、徳ハシム。助ハシム。のひーくと夢て、食せ天ハシム。と、  
い。彼男ハシム。あひ、徳ハシム。助ハシム。のひーくと夢て、食せ天ハシム。と、  
る。後ハシム。小路と間う所ホシに、づうてありけ。男ハシム。のひーく確り通



づき。嘗父母よ。まひふと居ひこそ焼け。と涙を流一歎ひ。ま  
かほる人の忤にやき。一枚と墨と借りうけ。ことを數きて父母を  
哉せ。まづ是にて安堵せ。とかの伴ひ出でる人をも。索ねて厚く恩詔。  
う不候りと云やう。半時ぢり在りけるが。稍に夜うけて肌寒さきた  
に心蒸きて老父母の。まぞう。まく在まらん。とそとより再び父母が  
住居。來に到り幸どて。済く横一つと先坐。肩ひしきて出る。と死。その  
弟に生會て。如些そのうて告ぐ。その弟は兄よう。も。の住居遠け  
き。ハ遙く。うり。うる。よ。と。陪従。と。緒共に度小路。る。父母の忤に往  
まづ。その。幸車と祝一ける。この弟は縁て。うり。お別まつて妻す。あ。  
殊にその所も北辰つくり。お居へ。ま。崩き。活。と。幸車なるを  
う祈り。道諸に呻吟。あ。と。父。父母の。うわみ。嫁と孫の身の

上。まふ案ド。你へ頑やき。稚き。の。身のうえを計らへ。よ。音。ひ。こ。ふ  
あ。う。珠。れ。兒。の。傳。副。あ。ま。ば。い。ま。う。心。あ。う。と。お。と。見。も。昔。く。に。勧。る  
あ。そ。さ。か。と。そ。身。い。あ。と。ま。は。見。の。終。歿。父。母。の。傍。り。と。獲。す。と。離。す。と  
な。程。う。一。もの。夜。の。宿。も。ま。ま。一。櫛。の。板。も。ま。と。ふ。於。て。皆。め  
て。心。づ。き。僅。む。う。の。殮。あ。う。一。ご。の。殮。勤。心。憲。き。懷。納。め。も。や。う。殮。弦  
生。て。漫。い。口。が。家。と。願。ひ。つ。と。及。む。あ。う。だ。父。母。の。傍。り。と。離。す。と。向。て  
念。ド。う。一。今。あ。り。が。夜。の。る。不。居。り。て。か。の。殮。ま。り。と。素。ま。と。癡。き。と  
ま。と。げ。り。ら。不。今。い。失。つ。え。ま。ひ。り。他。に。も。限。ま。す。まづ。立。床。り。と。有。立  
ら。だ。殊。に。寝。の。寝。集。と。て。入。て。捨。殮。の。ま。う。領。ま。る。の。ミ。家の。崩。生  
ふ。あ。う。ざ。れ。ば。立。入。て。こ。ま。を。下。る。ふ。育。に。生。す。一。時。の。ま。み。て。行。一。失。せ

ううのよ。男の大不敵びて、錢の懷へ。僅もうり残さる飯及び製  
さくする菓子まで。轍に入まで。考ひゆき。父母にも。進め。自分も含み。  
且父母の近隣ある甲乙小の惠とよそ。一時の飢を度せ。けれども。父  
兄親れあらん。親あるの志。唯ゆかあるべきなまこと。夫婦不睦  
の難ありと。まず。後まことに。圓す。金銀資財を先に。父母を  
後ふまうりのあり。もの男と遙隔れ。

因ふの天正の頃。何素とりの士人あり。重く登庸。而て。頭を  
務む。然るに。性未金銀をねき。是を。悔あを心に。折く。その  
黄金を出。書院に並べて。多寡を試。次第ふ雄る。藥と。ある。  
と。たまの士人例の。どう。珍る。黄金を出。書き書院に。布滿して。  
漫面。笑を食。限り。樂として。と。まを。瞻。を。ありける。うう

か。人素つて。今。粗下さる。誰く。最初の喧嘩より。脱れ。及傷。及ぞん  
と。生。頻素つて。絶め。と。急と。告ぐる。の。あ。と。け。の。人。啼。て。お  
稽き。黄金を。納むる。に。腹。う。と。ば。その。生。と。ても。や。と。が。その  
車。被。是。縫。と。あ。ひ。て。絶め。ざ。と。その。夜。を。明。し。翌。日。の。日。中。過。み  
や。う。と。緯。の。栗。一。く。べ。そ。と。よ。う。お。に。歸。り。一。ぐ。幸。不。好。ぢ。う。と。考  
き。る。黄金。生。將。書院へ。出。せ。」を。う。不。慮。に。逃。ぎ。の。始。ま。り。と。取。上  
一。墨。秋。を。放。出。て。京。に。帰。り。乗。れ。ど。も。更。に。そ。の。黄金。を。念。と。せ。ば。  
に。於。て。平。生。と。よ。う。士。人。か。で。金。銀。を。交。う。と。ほ。む。ひ。の。と。陋。と。  
織。る。の。の。多。く。しが。遠。因。の。と。よ。あ。の。そ。の。藏。ア。リ。の。ま。ふ。は。と。舞。え。  
か。と。こそ。士。人の。志。あ。ま。と。人。こ。ま。と。感。べ。と。り。う。そ。の。車。ひ。ま  
あ。ま。ど。も。そ。の。親。へ。車。文。に。り。菓。子。喫。の。男。に。似。う。

○較者未矣と識らの條  
 俗に傳てり。古へ來來の吉凶を知る。且天變地狀を知る。こゝで  
 神人と称ゆること。所謂吾朝安邦晴明。誠の大神。みどろ顎ひ  
 をり。鬼磨山明の時堪輿祿令と。人の吉凶悔吝を知る術あり。  
 或ひは鄙道人といふもの。肌骨の象を看て。その人の事と指し  
 えま中らざる所ぢ。是きいづる法術。世ふ傳ひ。移ば知ゆる  
 あり。但今の世人本然を識ら。名傍と称する人。千に二三中はあと  
 あり。易學の末然の工と。知る術うりとりふと。学者が新精かう  
 ぎ。俗情胸中に充ちり。辛うじて。まよふ。柔師の御街す。四  
 方都とりの育法師あり。誰人か考ひけん。人ふあて。夢を咬ば。  
 亟にその人の吉凶を識る。但の法師が天性免他に傳する人あ

矣。然るにこの人年々に此術の精一くならず。人の為に益があつ。己へ  
 きあきを悔えず。あたると見え得て。人ふ違どにその人の吉凶禍  
 福胸にうかび。右を流左きと限らず。忘記とあくど忘記。こゝ生  
 涯の苦勞なり。と歎息一々りひける。まふ文政十二庚寅秋七  
 月二日。今をきるて二十七年。その日中の時ちうしに柔師大に  
 就寝す。終中の土糞築せよ。崩落する所あり。就居大に  
 はと後ト怪我せし人も少く。人ふ大に忍きをす。家で毛り  
 生て大道小道物を敷つ。稚板の畜とて補理て。てふ居るて二月。  
 あるひは大寺の後内にうす。その搖返と遊ぶける。然るに二日目に  
 止て。もろそその名残をやうじ。ふさむ處ひ時くあり。始ちひ至後二  
 十度うち。後又へ遡るに寫遠く。七八度より五度にまよ。そま

ようせ日もうりをえて。行ゆき止もありけまじ。人くまどひ思ひくらふ。  
彼ふの忧農へ始め處く大圓へ中やどつゝ。雷へ素やどき一とえ。  
是とて死とすまび。始めらとの大農へあれゆと詠一ねまど。あ  
拵そなへ文い小鬼このうひへ。ふとあへト顛ひるぎ。舊記きうちきを舉てその理を。  
四方よの示あしとそのひの頑傷がんじょう。凌山りょうざん先生せんせいが著かて。大農考だいのうこうとし。書  
にひ。この詠を取て。すまび。始め大農ありて二日ふたひがわどひ。三夜みやに二  
十度じゅうども搖ゆ一とり。去年十月うべに都みやこの忧農うのう。その夜よ大小千度せんど  
カ。翌あさ宵よ後ごに五度ごど。四月よに度ど五月八度はくど。六月二度にど。十一月  
二度にど。十一月よの兩月二度にど。十五日じゅうごもき二度にど。十六日じゅうろくに度ど  
月よ二度にど。十八日じゅうはち夜よ一度いど。この時とき少すくなく雷雨らいふあり。十九日じゅうく二度にど。廿さん日ひ二  
度にど。廿四日じゅうよの五月一度いど。廿六日じゅうろく二度にど。廿七日じゅうしち一度いど。

この月總計八十度じゅうどのうち。至いた二十八度じゅうはくど夜よ五十二度じゅうにじど。その外ほかに紀すに遅  
あくび。夫おとこも遠とほくちる。とくと。年としを起て。五月まで。折おりて。微動びどう在  
ける。がねに。その波残はざまある。守國しゆくにに。もの微ひ動どう累月止とど。と記す。  
先年さき京都きやうより。或人の糸いとふ送り。織おりする。書状しょじょうと。その又またを。う。と  
その前文化九年きやう。ふや。十一月じゅういちに。京都きやうに。歸きき。忧農うのう。あり。然しか  
ども。衣崩いぶ。とび。所ところの土ど着き少すくなく。疊のぶのり。くるまで。あり。迹あとまつよ  
き。忧農うのう。ことを。憂う。の目的めと。従つぐ。の忧農うのう。と圓經えんき五分ごぶんと。系  
部くわ始はじめて。唐とうへ。と。圓經えんき。す。もう。小圓ちいさな。圓えん度どの。忧農うのう。より。六  
倍よと。如おう。と。似そ。以下げ。その。目的め。ふ。慣なまひ。て。う。と。或ひ。の。圓經えんき。一分いぶん。二分にぶん。まこと  
八分はくぶんの。り。も。あ。と。自じ時じを。ま。委ま。く。記き。と。そ。の。時とき。そ。の。忧農うのう。在あ。が。ど。く。景けい。る  
ま。の。書か。狀じょう。毛け。そ。り。そ。る。ふ。遠とほ。の。忧農うのう。系くわ。よ。う。の。度ど。數すう。を。審しん。く。且よ

搖り起一うらば。さうけとど枕巣考ふゆ。のるてくへ懼きて。大路れ  
卧そりの少すくに。周て日本橋へ何人。もと大巣の来る理あけまぐ。  
安堵してかに入を。然きく後く夜。死ふ犯さと病に。罹らんとつてを  
挂。國家と附て。奈を蒙れ。もと安きをうに是と続せり。余の性からつて  
小毛とえて。す人の至誠を感し。さて文改の度。承教の枕巣ふか。四方於  
との育法師。朝起ておの事と。大不祥りて。僕と。今日ハ大れ  
調子ねひて。驚き。笑ひのあくと。早く朝飯をあらめて。邊誠  
の方へ。伴うひゆけと。僕も豫て。えんが。朝來。竟得るとなむ。が。意き  
き入れ。朝飯を。途め。そのおも。惧に。食ひを。まひて。頬て。もと。撫ス。た  
て。急ぎ。邊誠の。きへ。至り。に。方。於。おも。安堵せ。そ。い。ま。此處にて  
て。も。調子。う。ま。さう。が。ま。か。光るに。あらば。愛宕の。傍。何。秦。年。

未の。御。きと。你の。御。所。う。と。く。被。處。伴。え。と。の。僕。意。を。恐。て  
密。宿。れ。す。か。の。傍。の。伴。に。ゆ。く。に。傍。へ。え。て。御。あ。く。何。ふ。あ。う。そ。早。未。  
未。生。一。や。と。向。け。ま。バ。四。方。於。養。て。さ。ま。と。よ。今。日。の。調。子。宣。一。う  
ば。や。小。衆。中。滅。却。せ。ん。と。生。て。然。且。ど。の。邊。あ。れ。を。人。あり。べ。き。事。か。う  
ね。ば。ま。う。我。の。三。事。を。出。て。邊。誠。の。方。ふ。至。ま。ど。の。經。調。子。の。沈。ま。る。や。未  
の。所。ま。を。来。り。一。と。大。息。ぬ。て。り。ひ。け。と。バ。傍。も。忍。て。ら。の。替。考。事。を。行  
智。と。び。うち。族。き。ま。う。足。下。が。心。あ。て。何。の。事。と。奈。一。る。異。ま。を。量  
と。ひ。け。る。れ。に。方。於。被。て。我。も。ま。く。元。支。あ。ま。と。が。御。り。ぎ。一。十。八。七。八。火  
天。あ。ま。ん。と。妻。時。あ。う。て。ま。考。へ。ま。ざ。此。處。あ。て。も。調。子。る。ひ。て。全。く。安  
堵。ま。一。雅。一。今。か。一。る。き。所。へ。あ。り。う。と。き。け。ま。一。バ。傍。へ。寄。て。是。う  
も。あ。き。こ。の。よ。へ。復。摩。宴。な。り。彼。如。へ。ゆ。え。て。え。よ。と。の。四。方。於。悦。び。ま。

身をひきとて。その嘗へ至り。身や坐て御子全く枕へうせぐ。身を展す  
ナキ。医術あらざらず。安堵して居る。その日中の別離の  
暮れ大忙騒動にて。かの護摩堂へ渓に宿す。四方教主僕にて死んで。  
法師ぬれを覚えて。人の吉凶悔咎ご知り。その人所十にて。八九の体  
外のことを。篤い自己が死場ふ至り。こ止をかげざるのにあくび還  
て御子を。安堵して。安堵して。安堵して。安堵して。或人を乞を仰て云く。  
此を五極の理なり。吉の極まる所へ吉う。喻  
べて陰極まる所へ陽を生ず。どくなり。既に必死の傷に及んで凶鄰で  
吉ふ。爰代武ひへ九死一生の病人をトモる。乾為天及び地天泰え  
ど。吉卦を得。さば知る人。ごよと吉と。歎べど。ごよ天うる。卦  
を。その人命活づ。是彼吉極まる所へ凶に變ざる所あり。バキ處れ

ひうて平ぐる。更に軽々くとひ

○地下より火をと發するの條

這田地裏のとき。地下より火を發し。余が友下谷池の端に居ます。  
彼等は春よとりのやどれ。急ぎ外のうへも生る。身の方へ盡  
り。大火光りと聲も。但電のめくらしが。その幅何十丈とも量り  
ざれ。が一面火乳も。頭皮に焼る。ほどと地中の大毛發へくる  
光り。もんと。他所より光りの眼ふ遼アリ。とひ人あり。とお發さ  
まく。樹木など。根をたる。火を明らかに見え。殊ぶかく不善れ  
て。火煙のをうあき。火の光りを知りぬま。他所の火と  
西北東くと。遙に本巣山の森ある。三周てその光りを覗く。火  
根を下瀧流ふ出で。泉の湧水あり。人の活ふに都の方にあく。火

のとくと西箇所とえけまど尋幸の禱妻と。もひ微てありうる。後  
お受けば地震あり。かの電のええむへ地中の大氣發してゐるや。是を  
見るよとえへ世俗たり。雷霆と同理。とくとも運へうづと語アモ。思  
ふに陽氣陰氣迫めりき。も衝突して發する。六養ひ勤くて理の  
事う。うべば人の瘧を癪に。疫不陰氣當てこと。爲に惡多。裡小  
蟻を食にて既に癥せんと。其ヨリども表の陰氣に閉らきて癥す  
を得。こふ於て身體を癪ふと。病あもしくて熱發する。とくに癥  
ひ止む。と世界ふとく。地震の理と同ト矣。

接するに試ふ地震の象と作ると。和漢二才園會に載す。  
まづ二三斗を容ぎ桶に。廣口を齊う。水を投ト。底の傳に。鍵に  
をつけて。投ド。水を出。縱ば流れる墨のね。人息をその鍵  
へ極めて試せ。あるべー

さて地震後十日二十日を経て。暗夜四方に光りて發し。聲ごと遠き電の  
如。あるもの頃人ふ語るに。ことをつくる者多。周てそつ地中の陽  
氣。既に大水發そり。ども。身も盡く出竭さむ。その名殘是夜とも。  
聞く水發まる。是は太陽の先りに見え。後のことをうる。さ  
るき岳にも。そつて。その光を何處と定ま。今その夕の最  
は土地うち。火を發する。ちくびけと。すれふある人の妙づる

の三

## ○神明萬民を憚るの條

その頃誰よりとく。専ら風説せり。がの大震にあひて。渾身傷損  
もなし。況て令セモ歿さる者。まよ神明の加護によき。因てその  
被をつる。白き毛長一二寸あるのあり。こまと伊勢 皇太神宮の  
弊へま新井て。あの毛あるの災害を免るといひあへり。りふゆ當  
下常用の衣冠の役より。向毛と見えぬにあへ。ソシテこの工事  
あらびとりひ継ぎ語る。世よとまとてかうざりのなり。然きども  
億兆の人民盡く然るにあらび。あまゆまく不側う。えま我 部を  
神國なる。貴様と下の人すりの神明の擁護にうちて榮えざるは  
あのも。皇太神宮より授けま。白馬のもありと。余が知已某ある  
て疑ひ詮べらば。

老人へ深く信するをあひて。このことて教ひ。家内あらび近隣の男女の被  
を探らすに多く二の毛生ふけり。長さ元七寸五六分。向くにて能あり  
と。夫神明の口計らひ。凡魚をりそ後るべらば。遙くよる神代より。  
中古逝世及ぶまで。さみぐの寿じきとあり。猶正史にも載すと。姿一  
て疑ひ詮べらば。

按るに天保年中也。伊勢山彦来りとひて流行諸の人民老  
少をひそめ。停勢の 宗廟小篠ると。数千人とのをかうび。因て道  
路參院の鞆へ。その疲労て扱んと。或ひへ馬籠を生じて。まこと  
せ。鎌糸を生じて。慈ふ食ひ。革。革鞋を放し。酒飯を放し。この放れ一  
箇の盤頭を放じて。生る者。行路脚の難あらび。數百里の道  
小篠と觸じ。因て少人女子ひとりども。欺き犯さる。と更れふ。實

小神明の眞意にあらびかのとれり及んで。但往古よりこの  
教度ある。大抵六十年にて一度行ひるとり人も。まことに不測うすや。  
天保度の山岳集りの筋。何方ともう。太神宮の大麻空中より  
降り来る。一渺小薩摩。下その中の一人。系官を企て心とも  
あくちねると。是を吹傳へてゆきと出るよう。殊ふ一邪に  
及び一正に及ばず。或人伊勢の山田に居り。かの太麻翁箇とも  
さく降て町武の屋上に墜る。人々不測ふたり。伊勢の神友小向  
ふれかの家へて失する太麻一箇もふーと。是に神變  
の不可思議を識るゝも。ものとまく中國畿内ふ多く墜つてその  
所。誰ともう。奈端を始め。東幽西云北陸山陰山陽の處々。  
舉つて未宮スーケーとぞ。遠へ近き世のとみ。誰くひそむ。

或人法て後論を立て。この工を猪アリモ。そと  
き。箇の奇焉ハ大日本。ニ千七百多坐の神社。に伊勢より外  
あると。又。极小這田の天災小も。この神の獲てす。更に所謂あ  
きふあくじ

或人法て後論を立て。この工を猪アリモ。そと  
懼。まことの天災を免ら一めぐ。俾は老なる。まふ。或ひ。矯死  
或ひ。壓死の。その負少ヌラビ。まよび。神明人ふよりて。異貞ある  
のみ。遠の例の奇をねむ族が。ひどく虚言あらん。かく  
のことを。亦如何みて。役小毛のあらやとなり。遠の者に天保壬  
申諸毛に作さし年。東都小毛を兩せーとあり。今猶その毛を  
藏する人あり。その頃世人の風貌に。或人歎の毛を晒せ。ふ。大風  
来アして毛を撫き。普く兩せ。ナリ。毛ど種。これひあら。グ全

左稿の事あらず。天比不正の事あらず。かのどまことあるなし。  
脫に唐土小もの例あり。唐の咸通八年七月下郡に沸湯を雨走  
て鳥雀を殺し。宋の端平二年七月血を雨せり。とある。元の至元  
二十四年土を雨にて七日夜。その深きて七八尺。牛馬盡く没死  
せり。その骨肉を雨一穀を雨。喬史れ往くスルる處何ぞも。モ  
兩さざらん。えり怪しみに至りのみ。その豫よも邂逅に人の役ふ  
入らむなり。と車のうび小議論せり。を和漢の古例を引き。そりより  
所確論やき。そく人是て伝服ひ。慈とども車てそま。去ぬ。美  
保度毛を雨走り。或人西域の書に放へ。また頭微鏡をりて是を熟  
視し。是毛にあらざることを知り。その辯を一紙に上木。か己の人に  
焼りてあり。余も一枚をぬる。今遺失して附近にみ。周て晴

紀のままで。举ぐ。折時候不頃みて。夏間天ふ陰を掩ひ。教目で  
経て日光を見ま。因て不時の冷氣行ひ。と稻穀。登つゞ見れ  
至は。この時陰雲の中に炭を生じ。その貌毛のど。その長さす  
よう。二二尺に及ぶり。あり。然るに風のとあふ次と比とえ。墮は。時  
草木の精液を吸ひ。ひんこに於て稻梁以下。菜蔬の類ひ。ま  
熟せ。モ。國土飢饉に及ぶ。西城の比ふ。此とあり。その炭をゴスサル  
とり。遠正除一毛とひ。則ニゴスサル。あり。頭微鏡みて。こまことアラヒ。ト  
脊れ七八の思惑ある。たゞバ禪のど。とあがき。所もある。全くの  
毛にあらび。蓋全體の色をあらび。多くふ美に思て。常て班文のやき在  
まと。微少にそその形勢り。ごと。がまだ遠回人の被に。在。と。大  
に異なり。後の識者の考へを俟

## ○ 崩土中より多く生ずる條

安政二乙卯四月初旬。石炭一俵地より崩を生じての数幾千俵となり。を知り。農民の墺殺たりのと報せ。二十五万七千俵。もつまどもの前減ト。うとりをえび。畠に入アそ麥を食ひ。大豆小豆の蔓と芋蔓。次。然はに翌五月ふ至り。何方ともうか教子の體。来つての崩を逐ふ。故に大半一減ぞと。但ちの體何より。来るとりを知る者。あ。土人ののち海中より。忽然として生ずると。あるがる奇譚。か。世に傳く。土人ののち。去年甲寅。國中に竹実。生ずると。許多之。養ふ。五石桶石を約て食用と。う。レシグ。又ふこの崩へ竹実の土中に埋き。一ヶ化一。す。地。崩の頭ふ竹实の殼を頂く。の。土中と生て。幼く。ふ従ひ。その殼。自ら落る。とぞ。

按るに。唐の弘道の初め。梁刃の食ふ大うる崩あり。長二尺。幅在。可ける。猶の爲不堪。と。千時。救百崩。忽然と。來て。かの猶と。嗜殺。少選。あつて。多飯。崩を。襲む。州人を。遣りて。大崩を。捕へ。うち殺して。しづ。き。外へ。まわ。と。り。て。ゐる。日本文ふ異。あ。と。ど。ゆ。崩の。周。に。す。と。縁。ひ。

## ○ 蝦蟇。巨蛇と鬪ふ條

下総の土人の話。同七月十六日。下総相馬郡大原の里。ふ一丈口五尺の巨蛇出る。このとき丈二尺八九寸の蝦蟇。出でて。ことと聞ふ。互に雌雄を。争ふ。と。あ。人を。攻撃。奇巧。と。て。吹傳へ。未だ。見る。の。数百。とり。て。しらべ。然るに。その夜。強ひ。及びて。鶴聞ひ。て。交せ。よ。ば。觀る。人。傍。ニ。呆。ま。る。か。ふ。岸。り。夜明。て。觀。ま。ど。の。ま。ご。聞。ふ。かくて。十八日。に。を。び。み。の。折。ふ。ゑ。り。て。巨蛇

死せり。蛇養グモの行方ヨハガを知スルべとぞ  
按るに和漢コシノニ才圓舍バカニ。蛇を咬ナフふ裏アリあり。文字集累タヌキあつまく。輪  
ハ輪裏ハシモトうり。大きさ屢々ララのど。鰐蛇カムツを食ミふとり。老シテ此コトうりと。又アリ。又アリ。  
小輪コハシの長大ナガヒうり。若カクれ

安政旦聞錄卷之下終

安政三歳次丙辰初秋發行

服部氏藏梓

